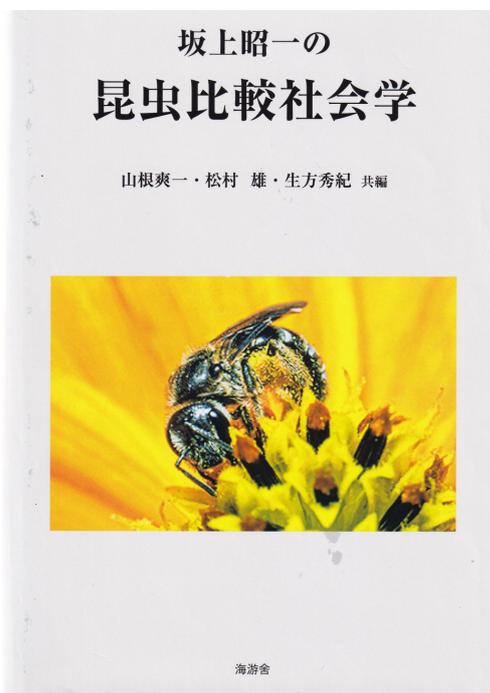


[新刊紹介] 山根爽一ら編『坂上昭一の昆虫比較社会学』(海游舎) / 西村玲子『ハチのいない蜂飼い』(天夢人)

前藤 薫

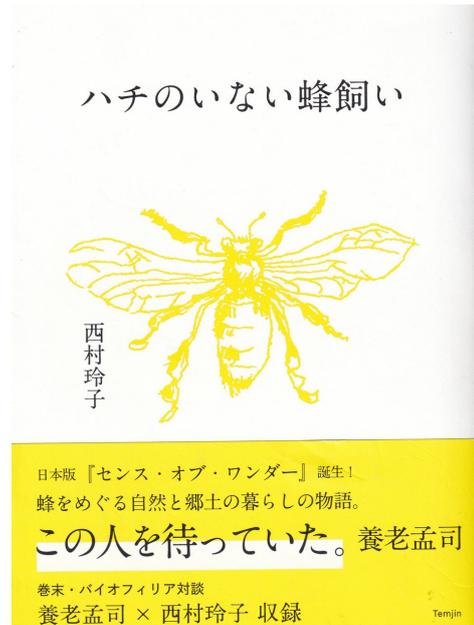
ミツバチに深く魅せられたお二人の本が、この夏あいついで出版された。

坂上昭一博士(1996年没)はハナバチ研究の碩学であり、『ミツバチのたどったみち—進化の比較社会学』と『私のブラジルとそのハチたち』は、真社会性にいたるハナバチ類の生態をきわめて精緻に辿りながら、少しも飽きさせない名著である。その筋立ては今でも斬新であり、アイデアに富んでいる。若い方々にも是非、明晰な文体と澁澁とした知力を堪能して頂ければと思う。



さて、『坂上昭一の昆虫比較社会学』は、お弟子さんらによって取り纏められた氏の評伝である。門下生や共同研究者だけでなく、博士の学問に感化された気鋭の進化生物学者が多数寄稿して、“坂上学”の世界を語り尽くしている。詳細については、海游舎の新刊案内 <https://kaiyusha.wordpress.com/> を参照されたい。

坂上博士は、北海道大学の理学部および低温科学研究所において学生を指導し、ハチ学にとどまらず動物行動学や進化生態学を力強く牽引することになる多くの才能を育てられた(米国に渡って鳥類の神経行動学を切り拓いた小西正一博士もその一人であり、印象的なエピソードが紹介されている)。若者を自らの専門分野に閉じ込めてしまう愚は言うまでもないとして、ではどうすれば良いのか? 学生や共同研究者の思いを尊重し、対話を諦めないことの大切さを、あらためて考えさせられた。



『ハチのいない蜂飼い』には、岐阜県郡上市に暮らす著者と二ホンミツバチの生活が、それらを取り巻く自然の四季や地域の人々との関りを含めて丁寧に綴られている。西村氏は、とくに虫好きなのではなく、故郷で営む洋菓子屋に自家製の蜂蜜を使いたいと考えて二ホンミツバチに出会ったとのこと。二ホンミツバチは家畜ではないので、自分は「養蜂家」ではなく、ただの「二ホンミツバチと暮らしたい人」なのだという。

だが、春の分蜂から始まる二ホンミツバチの生態あるいは暮らしぶりの描写はきわめて綿密であり、それでいてリズムカルで心地よい。夏になると巣箱の追加や採蜜、秋はオオスズメバチとの格闘や台風対策など賑やかに季節は流れる。二ホンミツバチがなかなか気難しい野生動物であること、セイヨウミツバチとの様々な違いなど、あらためて気づかされることが多い。地元の二ホンミツバチ研究者から指導を受けたというが、そのうえで確りと勉強されていることが分かる。

二ホンミツバチとの暮らしだけでなく、「へぼ獲り」「コケ採り」「しろとり」「七十二候」など、奥美濃の自然に裏打ちされた伝統文化が面白い。また、冬期灌水による不耕起水田稲作など、新しい試みも紹介されている。

ところで、タイトルの「ハチのいない」には、著者が感じる自然環境の変化への危惧が込められている。数年前のこと、マイマイガの大発生に伴って二ホンミツバチが著しく減少したのだという。巻末ではセイヨウミツバチの野生化についても懸念されている。いずれも著者の考察は慎重であるが、昆虫を研究する者に対して投げかけられた貴重な問いかけとして受け止めたい。

(Kaoru MAETO 兵庫県宝塚市)